

第二話 武田家所蔵の紅花屏風

村山地方に、「紅花屏風」と称される屏風が二双あります。その一双は、寒河江市高屋にお住いの武田健氏が秘蔵されるもので、もう一双は山形市三日町の長谷川吉三郎氏が保存されるものであります。最近紅花の研究が盛んになり、最上紅花を文化財として保護しよう、科学的研究を加えてその復興を計ろうとする運動が起きていますが、こういう気運から、この二双の屏風もまた新しい光をうけ、大変向題にされ、珍重すべき文化資料となつて参りました。

さて、武田氏所蔵の屏風は、六田の画家であつた青山永耕というものが、文久年間に描いたもので、以前は本郷葛沢の旧家阿部伝五郎家にあつたものを、寒河江市洲先の菅井半五郎氏の世話で、武田氏の所に所蔵されるようになったものだと、言われています。阿部家は近世後期頃から、月布川流域における豪商として名があり、特に漆や青苧の取扱が多く、上方との取引関係が深かつたのですが、紅花には直接関係したことは、余り少なかつたようです。従つて、若し阿部氏が永耕に頼んで描かせたものとするれば、当時京都の紅花回屋伊勢屋の店頭を飾つて、非常な評判になつていた紅花屏風（註一）今は長谷川家にあるものを見て刺激され、新たに郷土最上の紅花風物を、紅花の有名産地の一つである六田の画家に描かせたものであるかと想像されます。

永耕は狩野應信と名乗り、尾花沢の画家狩野永朔を師として狩野派の画風を学び、当時

はこの地方における同派の逸材となつた人であります。画風としてはもともと写生風ではないのですから、最上紅花の風俗を正しく描くためには、相当苦勞したらしく、川崎浩良先生もこの画面から受ける感じを、そのように言つておられます。しかし、こゝでは絵そのものを鑑賞の対象とするのではなくして、その内容を見ようとするのでありますから、取り上げないことに致します。

この地方の石老の言に「紅花は川霧のかゝる所に、煙草は山霧のかゝる所に。しということがあります。これは全くその通りであつて、早朝に立つ川霧の多いということは、紅花の茎や葉にある棘を軟かくして、摘み採る時に、手指を痛めることを少くするだけになしに、霧がかゝつたり、雨がかゝつたりすることは、紅の色素を花瓣に多く上げる作用もあつて、随分大切なことであり、普通紅花は朝日の上らない早朝に摘花するものだと云われる原因も全くこの点にあつたのです。従つて、紅花栽培の適地というものは、宮崎安貞の著し「農業全書」にも精しくあるように、「土性極めてよく光色ありてうるわしき土地であり、「黄赤黒の土の最も肥良なる」畑地であり、さらに加えるに、朝霧の多くかゝる盆地内の大川縁りが理想的であるということになります。

永耕の生れた六田は、白水川に焔んだ豊沃の土地であり、その辺から長瀬、蟹沢、野田にかけての一带は、最上川の影響をうけることも多く、紅花産出の一大中心地であつただけに、幼少の頃から直接見聞したり、或は自ら経験したことも多かつたことでしょう。そして画家となつた位の人でありましたから、性格的にも審美眼が深く、六月の畑一面に咲き競つてゐる花の優雅に、或は朝霧の中から聞えて来る乙女たちの花摘唄の情緒に、之

ては干花製造工程から売買までの、素材であつて、レかも景氣のよい農村の生活状景に、彼の絵心は充分に醸し出されていた画材であつたに違いありません。

このような環境のもとに出来上つた「最上紅花屏風」であります。全体の構図から見ますと、前半双には、農家の春祭りから描き起し、続いて播種の様子、そして中心部の遠景には、一面に咲き揃つた花畑と花摘みの景を写し、さらに進んでは生花の売買から、花寝せ、花乾場の景況を精描してあります。後半双になりますと、先づ荷主の店頭における荷作り作業や、荷送りの様子、それから紅花船の渡海入津の有様に移り、最後は京都における紅花向屋の取引状景を写して終つて居るのです。そして、その局部局部を仔細に観察しますと、当時の模様を奥によく窺ひ知ることが出来ますので、次にその局部毎にお話を進めましょう。

第一景は、作物の豊作を祈る農家の庭先であります。余程の大作人と見えて、家の構えや、部屋の様子等も中々立派に出来ております。半纏を着た男と、片肌を脱いだ男が、威勢のよい恰好で、お祝の餅を搗いておりますが、その掛声や臼の音が聞えるようです。座敷に坐つてそれを見ている恵比須顔の主人、美しく着飾つた姿で、餅搗恰好をさもおかレげに眺めている娘たち、道路の真中で、春風に凧を上げる元気な子供等、臼のまわりに遊ぶ雞から、軒先に出された牛に至るまで、一家揃つての春祭り、長閑で豊かな農家の行事と、その中に流れている気分というものを、奥によく描写しております。この餅を食べて祭りが終わると、やがて農家には猫の手も借りたいと言われる程の、忙しい日があつて来るのです。

第二景は大川に架けられた橋を挟んで、手前は播種の状況であり、向う側は花摘みの状況を描いてあります。山形附近では彼岸頃（例年三月廿二、三日頃）、寒河江、谷地、六田方面では清明頃（例年四月四、五日頃）に、先づ畑の準備を終り、前者では清明前後に、後者では土用穀雨頃（普通四月廿日頃）に播種をするのでありますが、画面では既に櫻も満開、大川のほとりの畑に立ち佇んでいる農夫の姿も一所懸命に見えます。整地之れ乍所に種子を播いている女の姿もよく出来ております。若い娘が小昼を持って来て、その労をねぎらっているようですが、最上地方の古くからの農耕風俗を、おちなくまとめておるようです。

大川を隔てた遙か前方に聳えている形のいい山は、最上山形を象徴する千歳山でありましょう。それを背景として広がった畑は、既に旧暦の六月に入つたと見え、川霧でお、われており、その合向合向に黙綴する花摘乙女の笠が、いかにも早朝のさわやかさを想わせます。山形地方の唄花は「半夏一つ咲き」と言われ、新暦にすれば七月の二、三日頃から、ぼつぼつ咲き初め、谷地や長瀬方面のものは「土用一つ咲き」で、七月二十日頃になつて咲き初めるのですが、それから一、二週間のうちに、咲き揃つてしましますので、農家にとつては特に匆忙を極めます。朝日が出てから摘んだものは、品質がおちますので、暗いうちからこの作業をしなければなりません。爽やかな朝の空気をふるわせて聞える花摘み唄の風雅さ、朝日を体一ぱいに受けて帰って来る乙女たちの生々しさ、如何にも平和で豊かな最上の里の情景が迫つて来ます。

いま橋を向うに渡るうとして、いる旅人が一人見えます。編笠に振分荷物、道中差を無難

作に差しておりますが、その紛装（マシ）から見て、京都の紅花向屋から、買付けに不つた手先の者でありませう。享保の末頃、京都に官許の紅花向屋が組織され、その売買に統制が加えられるようになるまでは、自由売買でありましたために、各向屋や紅粉屋では競って産地に手先を遣わしていました、またこの向屋制度は、その後色々な横暴な所業があり、幾度も廃止になつたり、組織に変更が生じたりしましたので、そういう時に主手代が下つて来ました。これらの手先の中には、何等かの都合で地方に永住したり、或は商売をはじめた者などもおりました。尚、この頃につきましても、私の別荘「最上紅花取引形体」に関する生産者並向屋の論争しというのを、一読下さるよう御願します。

第三景は花乾場の状景となります。花踏み、花寝せという作業から、花餅になるまでの仕事の順序や、その作業の方法、その用具立てに至るまで、奥に克明によく描写しております。こういうことは、自分自身経験してみるか、或は長い期間に亘つて、細かく観察したことのある者でなければ、中々こころは描かれないものでありませう。農家の広いお庭一面に乾し広げられた花餅の美しさを、そこに立ちゆく老若男女の田舎らしい風俗、さては商売を競う目早たちの活動状況等が、生き生きとして面白く出ています。山形市の旅館後藤屋の隠居が、明和八年に書いた「山形風流松木枕」の一節に、

扱東側に見えたる寺は覚生寺と申て阿弥陀堂也。尊称寺と申寺の下屋敷也。此二階座敷は尊称寺御院家様の御慰の涼所、此座敷より此紅花干場にて、六月時分は賤男賤女紅花に取掛る有様、亦々御慰なり。

という所がありますが、尊称寺の主僧が、下屋敷の二階座敷で一時の俗人となつて、涼を

入れながら、万日河原（註―この頃、馬見ヶ崎川は三島通りから県庁あたりを流れ、この辺りを万日河原と呼んだ）― 一帯に広げられた花乾場の風景を、如何にも興趣深く見られ、慰安の一つとなされたのも、こういう特異な風景があつたからでしょう。

大半切盤に入れた紅花を、襪一つの素裸になつて踏んでいる、血気な若者の姿も目につくし、数人の女が花餅をまるめながら、何やら賑やかに語っているし、何十枚と敷いた花筵に餅を並べる者、乾いたものを返す者、総てが忙しく動いている凶柄です。ピンと上つた天稗に驚いている目早の仰々しい姿には笑わせられますし、算盤を側において、今年の豊作に悦に入っている主人の、どっかどっかと構えた様子も、さぞかしと思われます。女子供に至るまで、何十人という人々が、各々その持場に働いているし、道行く人や子守りの衆まで手伝つたという程の人出を見込んで、商売に抜け目のない飴屋が、日除け傘をさした店を張っている所の描写は、画の目的からすれば、一つの點景に過ぎないのですが、如何にも自然で興があり、この場の空気を一層引き立たせております。

次には後半双に入つて、先づ第四景について説明しましょう。こゝは最上のある荷向屋の状況を写しております。先づ前図にありましたように、農家を走りまわつて、目早―この地方ではサンベとも言います―が干花を集めて来ます。しかし、干花だけには限りません。生花のまま、買い集めて来て、荷主の所で干花にする場合も多かつたのです。荷向屋となり、荷主となるには、相当の資本が必要でありましたので、そう数は多くありませんでしたけれども、主要な産地には勢力のある荷主が大部おりました。豊河江方面では中村七兵衛（註―現千原家）、安達屋又三郎、血沼の丹野三九郎等、河北方面では、和泉屋慎

藤左工門、柴田弥右エ門、堀米四郎兵工、逸見庄左エ門、宇野仁左エ門、本木林兵工、鹿野武石工門等、その外にも小さい荷主がおつたようです。勿論それらの人々が全部直接仕事に当つた訳ではなく、中には資金だけ出して、別に支配人を置いて實際の取引をやらせていた者もありました。囃中に見える向屋は、余程手広にやつてゐる者と見え、門構の大家であり、広々とした立派な庭園等も見えます。

旦那自らが玄関先に出張つて采配を振れば、若者たちは荷造りをする。番頭手代衆は筆太に商標や屋号を書き入れる、奥の間に仕事をしている奥様も手がつかぬと言つた様子です。

荷造りをするには、干花を紙袋に詰めて五百匁袋とし、十六袋で八貫匁作りの一捆とし、さらに四捆宛を花楚で包装したものを一駄と称するのですが、玄関側きで、二人の男が轆轤ろくろにかけて荷を締めてゐる所も見えます。商標は産地や荷主によつて、或は紅の性を表わし、或は紅に相応あうましく美しい名をつけますが、私の知つてゐるものだけでも五十種類位あります。丸紅、本紅、大紅、吉紅、紅梅等というのは前者に属し、国の司、天の司、最上一、兩錦、音姫等は後者の例でしょう。また水口、血沼等と産地をそのままに商標とした簡単な例もあります。

門前には既に運送用の馬も貳疋待つております。包装の出来とつたものから、順次この馬の背につけられて、陸路大石田の河岸まで駄送之れます。七八十才の老人は、物を運ぶ量を数える時に、今でも一たんニたんと言いますが、一たんと言うのは、つまり一駄のなまつたものです。一駄というのは、一疋の馬の背で運ぶ重量を基準にしたもので、物によ

つて違います。紅花の場合は三俵四十五貫匁、塩は二俵五十貫匁、砂糖等は三樽六十九貫匁が一駄になっております。

次に紅花の送路について一寸觸れておきたいと思いますが、紅花そのものが大変貴重品でありましたために、輸送の途中破船等という危険の伴い易い川下げの方法を出来るだけ避けたこと、それにまた、羽州街道の宿場経済の問題、最上川の水量の問題、船町との感情問題等がからみ合つて、百来羽州街道を大石田まで陸送の方法がとられております。勿論規定の街道以外は脇街道と称し、荷送りは嚴禁されております。谷地から大石田に出るには、富並の山を越して横山に出るのが最短巨離でありますので、運賃を軽減するためには、この脇道を通つた方がよるしいので、密かにこゝを運送して問題を起したという例が屢々あります。最上川による川下げの方法が禁止されていたために、船町の荷向屋たちはあらゆる手を使って、その解除を願つております。そのため、嘉永頃になつて、漸く百五十駄分の紅花に限り、その川下げが許可になりました。但しこの場合、紅花専門の積荷にしないこと、つまり当時の言葉にすれば「丸積み」にしないこと、羽州街道の宿方に対して、一駄につき三百文宛の代償金を出すことの二条件が附けられました。

大石田河岸に陸送された紅花は、こゝから最上川を下して酒田に出し、さらに海船に積み替えて敦賀まで運漕し、敦賀の荷向屋の手を経て、琵琶湖の北岸塩津か、時によつては海津に駄送、湖上を舟で運んで大津に着け、そして京都の同屋に送られるという順序で、並大抵の苦勞ではなかつたのです。

また別の方法としましては、陸路江戸まで出て、こゝからさらに東海道を陸送するか、

或は江戸から海路をとり、大阪の港につける場合もありましたが、この方法は運賃も嵩み
労力も多かつたし、江戸の回屋との関係も面倒であつたために、余り用いられなかつた
ようです。

第五景はいよいよ港入りの美しい静かな図です。恐らくは敦賀の港を想像したものでし
よう。何十という白帆が、すつかり凧いた海の沖の方から、続々と入港して参ります。白
帆の上部には、何れも帆印の屋号がくつきりと書かれており、一目で何処の船か判ります。
沖には標識が、海岸にはまた燈台が立っており、船着場附近には大きな荷倉が幾つも立ち
並んでおるのが見えます。前景までの治動的なものに比べて、非常におだやかな、それで
いて豊かな気分をそゝる場面でもあります。

この帆印と、第四景の中に見える屋号とを拾い、さらに最上紅花商人の屋号とを符号之
せてみますと、次のようになります。

- 1 ①長 長谷川吉郎次
- 2 ②二 吉野屋吉兵工
- 3 ③全 笹川 長六
- 4 ④全 三浦屋権四郎
- 5 ⑤谷 長谷川吉内
- 6 ⑥余 村井 清七
- 7 ⑦十 佐藤利石工門
- 8 ⑧全 佐藤 利兵工

- | | | |
|----|---|--------|
| 9 | 本 | 鈴木彦兵工 |
| 10 | 金 | 高橋伊兵工 |
| 11 | 刃 | 西谷金兵工 |
| 12 | 升 | 福島治助 |
| 13 | 規 | 伊藤茂石工 |
| 14 | 舎 | 柴崎善兵工 |
| 15 | 丕 | 市村小二郎 |
| 16 | 丕 | 岩瀬屋太惣治 |
| 17 | ⊕ | 木綿屋嘉兵工 |
| 18 | 卍 | 不明 |
| 19 | 金 | 不明 |
| 20 | 三 | 不明 |

以上二十軒の屋号がありますが、そのうち十七軒が山形の紅花商人であります。他の三軒は私の調査が不充分なために判明しないことは、甚だ残念に思います。山形市内か、或は近郷の紅花商でしようから、是非御教示を御願いたします。

さて画面は愈々最後の第六景に發展します。街を往来する人々の、如何にもおつとりとした上品な姿や、如何にも都びた風俗等から察して、確かに京都の紅花向屋であります。店先の紺の暖簾の中央に、大きく⊕と染め抜き、左端には紅花屋とあり、右端は霞にかくれて僅かに屋という一字だけが見えております。京都の紅花向屋の中で、こちらとの取

引関係が深く、そして(大)を名乗つたのは美濃屋と言われ、向屋でありますから、この図に描かれたのは、その美濃屋に違ひありません。

その美濃屋の店頭には、先着の最上紅花荷が数十駄一山となつて、幾つかの箇所に積れてあるむけでなれに、車や人の肩で運ばれて来るのも数知れないという景況です。そこには荷宰領らしい人もおつて、運送人に色々指図をしております。玄関入口の座敷では、手代共がその請取りに忙しく、二階座敷では、美濃屋の主人と思われる人と、先着の荷宰領たちが寄り集つて、取引値段の掛引でも行つてゐる様子、この時に決まる値段こそは、その年の農民たちの経済生活を左右するもので、手打ちの値段を京都から知らして来るのを、今やおそれと待つてゐるのであります。

紅花の値段はその年々の相場によつて、大変な開きがありました。谷地方面の資料によつてみれば、天明から約百年間の統計で、一駄については、最高は慶応二年の九十七両二朱、最低は文政七年の二十四両であつて、その平均は四十七両余となつております。この平均値段で、最上の紅花産出量を年額一千駄としますと、四万七千両という大金が、年々農民たちの懐に入ることゝなつた訳で、当時の幼稚な地方経済からすれば、大に影響をもたらしたことでしよう。それでは最上農民の生活は、非常に裕福であつたかと言いますと、決してそうではありませんでした。先づ農民の言うことを聞いてみましよう。

「紅花、青苧の儀は、土地相應の作付と申し、殊に六月に至り候ては、夫食一切御座無く、困窮の百姓は至極難儀の時節、紅花出来売買仕り候て、盆前後迄は漸く渡世仕候」と言ひ、「羽州の儀は雪国に付、畑方一作にて困窮仕り候得共、紅花ばかりにて漸々取り続き

罷り仕り、別して紅花の儀は鹿地にて生い立ち宜しからず候向、随分土地宜しく、御高免の畑地え仕付け、紅花一色の助成を以て、是迄御年貢滞り無く御上納仕り来り、百姓渡世相送り申候じと言うが、全くその通りでありました。

以上で武田氏所蔵の「最上紅花屏風」のお話を終りますが、筆者永耕は六田の生れであり、絵の修業もこちらで積んだ者であるから、敦賀は勿論のこと、京都の方も実は余り不案内であつたのではないでしようか。そのためか、前半双から後半双の最初にかけての描写は、非常に写実的で、人物も生き生きと動いておりますが、第五景第六景になると、大切な部分を霞にぼかしてしまつたり、全体が想像的に描かれているような感じが致します。しかレこの屏風は、当時の最上紅花に關する経済文化史上、誠に貴重な資料の一つでありますから、大切に保存すると共に、今後一層の精密な研究を要するものでありませう。

もう一双の紅花屏風は、前記のように山形の長谷川吉三郎氏の所蔵されるものであります。武田氏所蔵のものと比較して見ましよう。この屏風の出来たいきさつに就いては次のように伝えられております。当時京都の紅花向屋の一人に、最上地方との關係も特に深かつた伊勢屋理右エ門というものが居りましたが、紅花生産の状況を精描した屏風を作らうと考え、京都の團家横山垂山に依頼しました。伊勢屋としては、品質の最も優れた紅花を生産する最上地方のそれを欲しかつたのでしうけれども、余りに遠路のためか、こちらには来ませんで、前半双には武州地方の干花製造のところを中心として描き、後半双には奥羽大河原金ヶ瀬附近の、干花から荷造りまでを中心として写したものと言われております。その落款によりますと、前半双は文政六癸未の秋に、後半双は文政八乙酉の秋にな

つたことがわかりませんが、華山四十才頃、足掛け三ヶ年を費して描き上げたものなので、京都の人々は、あの美しい化粧用の紅に見ほれ、あの艶やかな友禪染に心を引かれてもその原料が出羽奥州から送られることにも、その生産に農民がどれだけ苦勞しているかも、生産過程がどうなっているかも、深く考えて見ることは無かつたに違ひありません。そこで伊勢屋では、京都最大の行争と言われる祇園祭の時、この屏風を店頭に飾って、道行く人々に公開することにしまし、これが評判になって、例年伊勢屋の前には人の山を築いたと言われます。

しかしながら、一般の人々には單に珍らしいと言うだけの事、紅花生産の全体を正しく知ることは出来なかつたのです。というのは、半双毎に地域が異つておりますので、その技術もまた相当に違つております。また描かれてある内容が、干花を作る工程の部分だけに限られておりますので、紅花生産の一貫したものを知ることが出来ないので、それでも京都の人々は別に不思議とも思わず、どこでもこういうものだろうと珍らしく見ていたことに違ひありません。

この屏風が山形に由来する理由や年代については、余り明かではないのですが、伝える所によりますと、この屏風が出来てから回もなく、伊勢屋は閉店し、家財等も売払わねばならない運命になりました。その時、伊勢屋と取引上の深い交りを持っていた山形十日町の佐藤利兵衛氏が、この屏風を譲り受けて山形に持ち帰り、それがまた長谷川氏に入つたものだと言われます。

「最上紅花屏風」とこの屏風が、何れが先に描かれたかという事は、中々むづかしい

向題でありますが、こちらの屏風について川崎浩良先生は、「華山の描いた屏風の図柄が、最上の風光に即していないうらみがあるから、最上紅花の眞相を描くべく注文して作つたものと思われるが、その製作年代も多少華山作屏風が山形に移された後、即ち文久頃であるうと思われる」と考えておられる様です。

この二種類の屏風は、よく比較してみると、地方によって大変に異つた手法や風俗が窺われ、全国の紅花史研究の上から尊い資料となります。それで、特に前者と違つた奥を拾つて、一應の説明を致しておきませう。

武州の風景を写したと言われる前半で、直ちに氣のつくことは、花餅の大きさであります。大人の頭ほどもあるうと思われる花餅を、一枚の戸板に十箇を並べ、大の男が二人で運んでいるのや、三、四箇を並べたものを、一人で重そうな恰好で持ち運んでいます。こちらの花餅の大きさや形とは、大部違つております。「三才図絵」や「紅花俗伝」等という本によりますと、

最上の紅餅は、大きさ錢の如く、西国の紅餅は、円径三四寸許り

とありまして、地方によりその形も様々あつたようです。「本草綱目啓蒙」という本では、この奥をモツと詳しく説明し、

ゼニバナト云ウハ、扁ヒラグツネテ、錢ノ形ニナシタルヲ云ウ。集解ニ、捏ネテ薄キ餅ト成スト云ウハ是ナリ。是ハ夏ク染屋ニ用ユ。奥州仙台ヨリ出ルヲ上品トス。出羽ノ山形コレニ次ク。同州谷地、奥州三春之ニ次ク。奥州ノ物ハソノ形小ニシテ薄シ。コレハ辨ヲトリテ少シツ集メ、席シノ上ニナラベ、ソノ上ニ席ヲ蓋ヒ、オモシヲカケ、錢

形二苜ルモノナリト云ウ。

肥後ヨリ出ルハ、大キサ二寸許リ、厚サ五分許リ、円形ニシテ硬シ。コレハ竹筒中ニ入レ舂キカタメ、出シテ切りタルモノナリト云ウ。

又肥後ヨリ出ルハ、薄クシテ大キサ三寸バカリ、是ハ奥州ヨリ出ルモノト、其製同ジト云ウ。

と書いております。また、村山郡長崎村の百姓代弥石工門が御役所に提出（註一）刃十一月とあり、文政以前のものゝ紅花作法には、

摘みとり候花を桶に入れ、水を少々入れ、踏み付候。もつとモ此ふみ方にモ加減これ有り、それより水を余計に入れ、黄氣を能くあらひ出レ、灰に入れ取上げ水を切る。それより大へき又は莖に揚げ置き、一二夜も寝せ置き、夫より一寸位にまるめ、是を莖にならべ、其上に莖をかぶせ、上より踏み付け、平くなるとそのまゝ、ほし立て申候。花の丸め方は国々により違ひ御座候。最上は本文の通り。米沢は手のうちにまるめ、直ちに莖へラフレ申候。会津は三角に蕎麦形といたし候。

と見えます。「べに一覽」というものには、羽州本庄の近傍、石ノ脇附近には、摺花と言つて、花辨を雷盆に入れて搥り固める方法もあるようですが、最上地方ではこの方法のあることを聞きません。

函中に見える頭大の花餅は、少々誇大に過ぎる感がありますが、画としての効果技術から止むを得ないでしょう。こういう形のものは、袋詰めにはしないで、一箇づつ計量して売り渡されたものと見え、店頭にその状景を写しております。用具立て等は、こちらより

余程大ざっぱに出来ています。

特に描写が印象的で面白く出来ているのは、荷向屋の前の路上で行われている乱闘の場面でしょう。京都から下った手代共か、或は地方の目早共と思われる数人の者が、入り乱れての格闘を演じておりますが、一人は投げられ、一人は鬚をとられて振りまわされていくかと思えば、そば杖を食った盲人が、笠を飛ばして倒れかゝっている図体等、売買に氣負い立つ花場の光景が、如実に描かれております。この図を見て思い出すのは、山形市七日町に立つ花市の雑踏を、軽妙な筆で述べている例の「山形風流松木枕」の次の一節です。

この抗より七日町という。軒数九十七軒。此町紅花時分の最中は市場を立て、京都より紅花仲買の旅人下りて売買仕る。他国の衆は知らぬ、其時分は男も女も狂人の如く姿を崩し、いつ櫛の齒入れたる俣やら、赤裸になり、何か一ヶ月の儲か、一年中の暮レとなりぬこと故、前後を争い、親兄弟の見境もあらばこそ、我劣らじと買うことなり。昼夜の境なく賑い申すなり。

屏風中の乱闘の状況と、この文章とを対比してみますと、まことにもって「他国の衆は知らぬし花市場の賑い方でありました。何しろ一ヶ月の暮レを、この一ヶ月で占めようとする目早、サンベ、仲買人等にとつては、まさに命がけのことであつたに違ひありません。画面に描かれた喧嘩位のこととは、或る日の風景や、作者の思いつきの點景ではなくして、むしろ日常茶飯事であつたこと、思われます。明和元年の奥河江石川村の書上帳に、「六月九日より同十五日まで紅花市、新町に市立申候じとありますが、明和以前から奥河江の新町にも花市が設けられていました。この市もやはり花の盛りになりますと、この図や文

章のように賑やかだつたことでしょう。

後半又は、前にも言いましたように、文政八年の秋に出来たもので、仙台大河原附近の状況を写したものです。この地方のものは、干潟の風景も、向屋前における取引状態も、最上地方と殆ど変りありませんので、画面の説明は省略いたします。左へ一言附記しておきたいことは、大河原辺で生産された紅花は、わざわざ羽州に廻し、大石田から積み出されたものが多かつたということです。それは、新山駅の荷向屋武田家の記録してある天明三年の「往来御役荷物並入用留控帳」に、幾つかの例証を載せているので判明します。一寸考えると常識でないような輸送径路を、どうしてとつたのでありましょうか。その原因の一つに運賃の問題があります。大河原から陸路駄送にして、江戸を径て京都までの運賃は、一駄につき金四両もかゝつたのに対し、大石田、酒田、敦賀を通り、大津に至るまでの運賃は、僅かに両面と入拾文に銀十匁レかかゝらないという低廉さでありまして、これに大津から京都までの分を加えてみると、江戸廻り陸送の場合に比較にならない程安かつたのです。これは全く妙な話ですけれども、当時の交通事情や経済事情というものは、今の常識で遮断することは、危険なことなのです。また江戸には株式会社仲間という向屋組織が出来ており、紅花商品等も、この仲間の手を徑ないで直送するものを「打越荷物」と称して、嚴重に取締るといふように、封建的な中央特権を振りまわし、急ぎの荷物等は兎角円滑に行きませんでしたから、少々日数はかゝつても、運賃も安く、気象に送れる山形廻りの日本海輸送法をとることが多かつたのでしょう。

このような関係から、最上地方と大河原地方は密接な関係があり、紅花生産の状況等も

、自然と変りがないものになっていたのでしよう。

最上紅花の栽培というところが、幸いにして将来復興することがありましても、それから紅を抽出する方法等は、必ず新しい科学と技術とに変わって来ようから、古来行われて来ましたような、素朴で古風で、レかモ大げさな製造過程の実現というものは、恐らくこれらの屏風で、モなければ、知ることが出来なくなる争でしよう。